クラーク室内管弦楽団
第 36 回演奏会

“麦酒のお供にロマン派音楽を！”

2015 年 8 月 28 日（金） 19:30 開演

北海道クリスチャンセンター・ホール（2F）

(札幌市北区北７条西６丁目 <http://www.h3.dion.ne.jp/~hcc/>)

入場無料

プログラム

F. リスト （1811-1886）

ハンガリー狂詩曲第2番ハ短調

R. シューマン （1810-1856）

交響曲第3番変ホ長調Op. 97「ライン」

指揮：奥　聡　（メディア・コミュニケーション研究院）

お問い合せ：011-706-6595
（工学研究院・フロンティア化学教育研究センター　下川部雅英）

プログラム・ノート

音楽は物理的には空気の振動の集合に過ぎないはずなのですが，それが人を楽しい気分にさせたり，悲しみを癒してくれたり，ときには大きな感動を与えてくれたりします．そしてクラシック音楽の中にもいわゆる「標題音楽」として，具体的な題名がつけられ、そこからどのようなイメージを表わす音楽であるのかが明示されているものも少なくありません．では，実際の演奏者や鑑賞者はどの程度作曲家がその曲に込めた思いを共有できるのでしょうか．「悲愴」などのように，時代や地域を超えて同じ気分がある程度共有されるものもあるのかもしれませんし，作曲された時代や地域性に大きく依存しているものも，つまりその具体的な文脈から離れている人にはその曲の意図されたイメージが獲られないものも，たくさんあるように思います．たとえば，**F．リストの『ハンガリー狂詩曲第２番ハ短調』**．21世紀の東洋の端の島国で，19世紀のドイツ・オーストリアの人々が抱く「ハンガリー風」がどのようなものであったのかを，理解するのはたやすいことではなさそうです（日本の学校では「運動会の音楽」というイメージが強いかもしれません）．それでも今日まで世界各国で演奏され続けている楽曲というのは，その具体的な標題を超えた，何かしら普遍的な魅力を備えているようです．リスト自身はハンガリー生まれなので，自民族の音楽の特徴を込めて一連の「ハンガリー風」を書いていたのでしょう．ただし本人はドイツ・オーストリアで教育を受けて育ち，ハンガリー語は話せなかったそうですので，事情はもう少し複雑かもしれません．いずれにしても，時空を超えて「異国風」を想像してみるのも，このような音楽を演奏し鑑賞する醍醐味の１つでしょう．

シューマンの『交響曲第３番変ホ長調Op.97』には「ライン」という標題がついていますが，これはシューマン自身によるものではないようです．しかし，デュッセルドルフに移り住んだシューマンはライン河岸の散策を好んだそうですから，この標題もシューマンの気分が大きく反映されていると考えてよさそうです．壮大な大河の雰囲気から，のんびりとした川沿いの散策など，さまざまなイメージが駆り立てられる曲想となっており，聞いていても本当に楽しい音楽になっています（演奏するのには大変な部分もありますが）．５つの楽章からなり，当時の交響曲としてはやや変則的な構成なのですが，なかでも第４楽章は，ライン川沿いの街ケルンにそびえる大聖堂とそこで行われる大司教の枢機卿昇任の儀式の厳かな雰囲気が強く表れていると考えられています．シューマン自身がこの楽章にはじめ＜荘厳な儀式を伴奏するように＞と題を書いており（のちに本人によってこのタイトルは消されていますが），この交響曲に強い個性を与えています．Dolceと書かれた軽快な最終楽章の後半にも，この第４楽章の荘厳なテーマが顔を出し，フィナーレに素晴らしい効果を与えています．「川」を題材にしたクラシック音楽は少なくないようですが，「ライン」はその中でも出色の作品と言えるでしょう．

霊長類学者の山極寿一氏によると，人間と他の高等霊長類との決定的な違いは「共感力」の有無にあるそうです。何十人もの人間がお互いの音を聞きあいながら，ひとまとまりの音楽を紡ぎ出してゆく合奏という行為は，まさにそうした「共感力」なくしては成り立たないものです．さらにその空気の振動を聴衆と共有することによって，それぞれの人の心の中に喜びや安らぎその他さまざまな情感が湧き上がってくる演奏会というイベントは，人間にしか作りえない不思議な場・空間であると思えてきます．食べ物を分かち合うといった即物的なことだけでなく，精神的なものを共有し合うという意味で，演奏会というのは人間の持つ「共感力」がもっとも人間らしい形で立ち現われている，かけがえのない瞬間なのかもしれません．今宵はみなさまの心の中にどのような「風景」が思い浮かびますでしょうか．

（メディア・コミュニケーション研究院　奥　聡）